

新刊紹介

淨土系思想論

鈴木 大拙著

淨土系思想に關する文獻は誠に汗牛充棟である。然し乍らその大部分は所謂宗學者の手に成るものであつて、一般知識人に依るものではない。後者によつて書かれたものは、多くは斷片的、部分的で、纏まつたものは極めて少ない、此の事實は淨土系思想が現今の一般知識人の思想界に於て十分に其の地位を與へられて居らぬことを意味する。少くとも淨土系思想には知識人がそのまま受け入れることの出来ぬ様な性格、ある特殊性、限定性があるものと見ねばならぬ、然も此の特殊性、限定性が善い意味のものか、悪い意味のものかは問題である。その特殊性、限定性の故に淨土系思想は却つてより、善く受け入れるべきものとなるか、或は斥くべきものとせられるかは、一に此の淨土教的宗教體驗の眞理性の鮮明の如何に依るといへよう。淨土系の宗教が夫々の宗門内に踞踏して居る心算なら兎も角、其の體驗を生かして一般思想界を動かさなくてはならぬものなら（如來の法を弘めようとするなら）、其の體驗の眞理性を受け入れられうる様な形で——と云つてもそれは決して妥協であつてはならない——鮮明せねばならぬのではなからうか。而してこ

のことが成就せられるためには宗門内だけでなく、宗門外の力をも必要とする様である。鈴木教授の淨土系思想論は此の意味で、かゝる宗門外の力の一つであるといへよう。

著者が禪者であることは周知の事實である。然し著者はまた可成昔から淨土系思想に接觸して居り、ことに最近頃には是との親しみを加へて來た。其の結果が本書所収の六篇の論文——一、眞宗管見、二、極樂と娑婆（無量壽經を讀みて）、三、淨土觀・名號・禪、四、淨土觀續稿（淨土論註を讀みて）、五、他力の信心につきて（教行信證を讀みて）、六、我觀淨土と名號（淨土論、名號論）——である。

これらの論文は『其時其時の感興から製作せられたもの』で、『組織的に考へられたものではない』が、全體として一つの纏まりを見得る様である。此の全體の中心は著者の淨土觀である。淨土、及び淨土と娑婆とのつながりを著者自身の宗教的體驗を通じて鮮明しようとするのが著者の關心の中心であると見ることが出来よう。扱て此處で、淨土が問題である。

著者はかう宣言する。『淨土は此土を辭してからゆくところ、此土を離れてどこか遠いところに在るものと考へるのは間違ひである』。淨土は超時間・空間的な世界である、そしてそれは唯一の實在界なのである、我々は普通此土を實在界とし、そこから淨土が實在だとか、非實在だとか論ずる、だが著者からいふと、淨土こそ眞實界で此土は方便界であるといふ。此土は淨土によつてあらしめられるのだといふ。たゞし淨土が實在界といつても觀念的に實在だといふのと同じではない様である。淨土

といふ世界が事實實際の上で存在してゐて、日常そこに往來することが出来るのである。

淨土と娑婆とは同一ではない。否れどころかそれらは絶対に相容れぬもの、對蹠的なものである。淨土は『畢竟淨』を原理とし、感覺面では不汚染性、知性面では平等、調諧、完璧、無分別、自己充足、自由、創造、常住不變を其の性として有してゐる世界である。(如來の悲智を利土的に象徴したものである。)娑婆は全く其の反對である。淨土と娑婆は絕對矛盾である非連續である。

が然し淨土と娑婆とは全然別個の世界ではない。淨土は娑婆を離れてあり、えぬもの、又娑婆は淨土を離れてあり、えないものである。娑婆があるとすれば淨土によつてあるのであり、淨土があるとすれば此土になくしてはならぬ。娑婆とか穢土とかいふことが考へられる處に已に兩者の不離がある、淨土の動きがある。淨土と娑婆との不離は體驗の事實である。思惟の要請などでない。この體驗をあらはすものが生死即涅槃、煩惱菩提體無二、虛無之身無極體などの表現である。著者は『阿彌陀佛は安樂國の娑婆界に在る。』といふパラドキシカルの表現をする。たゞの淨土では彌陀は彌陀でなくなる。従つて其處では彌陀は見られない娑婆界(極樂を全うしたる娑婆界)でこそ彌陀が見られるのである。淨土はどうしても此土になくしてはならぬ。淨土と穢土とは絕對矛盾の自己同一である。非連續の連續である。

従つて淨土往生は時間的に肉體の死後、空間的に西方十萬億土の向ふの世界に生れかはることではなくなる。超時間・空間

的の淨土と娑婆とのつながりがつくことである。娑婆が娑婆性を有しつゝ淨土となり、淨土が淨土性を有しつゝ娑婆となることである。(但しこれは普通の娑婆即寂光土の意味ではない。)娑婆がいはゞ淨土の中に消えてゆくことである。これが自然法爾であり、佛智不思議につけしめて善惡淨穢もなかりけりである。これが本願、正覺、淨土の成就である。信、住正定聚、證大涅槃であるといふことになる。そして淨土と娑婆とがつながつて居ることを示すものが名號、淨土眞實界の名乗りである我々はこれに依つて兩界のつながりに入ることが出来るのである。而して此の體驗を示す論理が廻向の論理である。廻向の往還二種は娑婆が淨土にうつり、淨土が娑婆にうつることをあらはすものだといふのである。

一體眞宗教義の上では本願も正覺も、現當二益も、往還二廻向も、——すべてが時間的延長の上に展べ擴げられてゐる。然し著者は超時間的な宗教體驗(信の一念)の上にこれらを見るので、すべてが相互的、循環的である。信の一念でこれらが實證せられる限りでは此の如き鮮明も又必然的であるとも見える。然し其の場合、眞宗教義の時間論は問題となるべきものだ。其他著者が此處で間接に呈出してゐる諸問題については専門の學者よりの批判を期待する。かゝる機縁から大法が益々々性を加へる事を冀ふのはひとり筆者のみではなからう。

鈴木教授の立場は結局廣い宗教經驗の立場である。『宗教はすべて不可思議經驗の上に立つ。』此の不可思議は『畢竟じて如是の世界、一眞實の世界・法常爾の世界』である。此處ではあら

ゆる佛教經驗否あらゆる宗教經驗が一つになる。然もそれらは同一でありつゝ差別し、差別しつゝ同一である。(然しこれは理同事別といふ意味でなく、事々無碍といふ意味である。)佛心と凡心とが無碍の一體を成立せしめてゐるといふのが、著者の主張であり、こゝからすべて見られてゐる。般若の論理、即非の論理もこれをいふためである。

とまれ本書はたゞに眞宗學の研究者に對してのみ示唆に富むといふ種類の書ではない。廣く一般に推賞する所以である。

(S)

宗教的世界

大友 芳雄著

獨逸純正哲學の研鑽に精進せられつゝ、一面常に眞宗の教義に深い關心を有たれ、直接親鸞聖人の教に生きられる著者が、この三四年間、折にふれて書かれた隨筆集であつて、收めるところ十六篇。或は宗教に於ける傳統と創造の關係を論じ、或は「生きていること」は絶對者の慈悲に包まれて生かされることであると述べ、釋尊が尼連禪河のほとりて村嬢から牛乳の供養を受けられた話から、食衣住の宗教的受容を語られ、或は「み民われ」の自覺は眞實の意味に於いて、眞宗教徒の自覺と一致する事を明かにし、地獄一定のすみかと確信する所に開かれる無碍の大道を述べて、この道こそ安んじて行き得る道である事を述べられる。著者は序文の中に、諸篇の底深く貫き流れてゐるものは、

宗教の立場から人生の正しい觀方や生き方を明かにするといふ事であると述べて居られるが、其の趣旨はよく達せられてゐる。取り上げられた問題は必ずしも嶄新ではないが非常時局を深く體認して居られる著者は、問題を常に自身の上に取つて清新な感覺を以つて解釋して居られる。著者は先に知識講座の一篇として「宗教の話」を公にせられ本書と共に一年に二部の書を刊行せられた。我々は著者の筆硯いよ／＼健かならん事を念ずると共に、この次には著者の専門に關する本格的勞作にお目にかゝりたいと念願してやまぬ。終りに本書所收の篇目を掲げておかう。「宗教に於ける傳統の意義」、「生かされて生きている」、「惡の問題」、「怨みを超ゆる」、「食の宗教味」、「謙ひのこゝろ」、「福と禍」、「無底の慈悲」、「唯心の道」、「隨順の境地」、「持ち味」、「母性愛と觀音菩薩」、「心の眼」、「苦難を超ゆる」、「み民われの自覺と菩薩精神」、「安んじて行ず」。(B六、二〇二頁。臺圖六拾錢。大阪市西區新町南通三ノ四八、敝文館)(松)

南方佛教の様態

龍山 章眞著

南方圏の政治經濟建設はその基礎に強靱なる文化工作を持たねばならぬが、それには先づ南方圏の過去と現在とを通じてそれ自體の文化一般を適確に認識しなければならぬ。南方佛教に對しても亦當然深き關心が寄せられてゐるが、著者は既にその成果を提示した。著者がこゝに南方佛教の「様態」といふのはそ